好きこそものの上手なれ

第37話

回胴倒錯者

—PACHISLO FREAK—

その後

サクラ事件から1ヶ月程が経過し、それを口にするものも極稀となった。表向きは平穏さが戻ったように思われた。しかし、その強烈なインパクトはなかなか消えてしまうものではなく、再度それが起これば乾燥した冬の火災のように、簡単に燃え広がってしまう。わずかにあった期待や信頼と言う消火器が既に無くなっているからなおさらである。

一方、店長はというと、相変わらずの高笑いを繰り返し、そんなことなど完全に忘れている、もしくは気にもしていない様子だった。もちろんその件の最中でも気にもしていなかったのだから、いまさら気にするわけも無いのだが…。そんな状態を直接目の当たりにする私にとっては皆と少し異なり、設定表に6の並びが存在すると、すぐさまそれが再燃し、もしかして…という胸騒ぎが発生していた。さらにその他の店長の何気ない行動においても、今までは全く気にも留めなかったものが妙に引っかかり、まさに疑心暗鬼そのものだった。これはTさんにおいても同じ状態であるのは間違いなく、それに耐えかねてきていたのか、私に「辞めようと思う」という発言が時折飛び出していた。私にとってTさんを失うのはあまりにも過酷である。仕事が増えるという単純な理由ではなく、同じ立場の人である、信頼できる仲間である、人生の先輩である、これらを失うのはあまりにも痛い。だからと言って、このアヤシイ場所に引き止めるのもなにか違う、そうすべきではないような気がする、しかしここを去られるのは私が辛い。この葛藤のなか私はいつも同じ返事をする「マトモな人が減ると余計に悪化します」と。

非日常

それから数日後、早番で出勤した私はいつものように開店準備を済ませ、朝礼をし、ホールの巡回や事務作業などをこなしていた。それはいつもと全く変わらずなんの変哲もない日常だった。夕方4時前にTさんが出勤してきて、2人で引継ぎの連絡業務が始まった。今日の出来事やイベント内容の再確認など、それもいつもとなんら変わることなく、淡々と行われた。あまり喜怒哀楽を出さないTさんなので、私はその異変に気付くことはできなかった。夕方6時を回った頃、「ではお願いします」そうTさんに告げると、私はいつものように帰路についたのだった。

帰る途中でなんとなくパチンコ店に立ち寄ってみる。そしてなんとなく「北斗の拳」の遊技を開始する。運よくそれが千円でヒットし、さらに10連チャンを越えたとき、携帯に着信が入った。携帯画面には「店長」と言う文字が出ており、慌てて電話に出る。

「はい」

「お、騒がしいねぇ、出てんの？」

「いま北斗で10連チャン中です。」

「あそう、ちょっと話があるから、それ終わったら店に来てくれる？」

「分かりました」

台に戻り、遊戯を再開していたが、頭の中には「いったい何の話だろう？」という思いが駆け巡り、ふと我に返って画面を見ると、ケンシロウが剛掌破を浴びていた。雲の流れやリン、ユリアに期待するも当たり前のように撃沈。さっきまでの流れが吹っ飛ぶ店長からの電話。いったい何の話だろう？という疑問は「きっとろくでもない話だ…」という答えに決定してしまった。しぶしぶメダルを流して換金すると、再び職場に向かって車を走らせた。

店に到着すると、従業員用の駐車場に乱雑に駐車させ、事務所に急いだ。中に入ると、店長がパソコン前に座っているだけで、そこにTさんの姿は無かった。

「早かったねぇ、何連チャンした？」

「11連チャンで終わりました」

「ヒャハハ、あれからすぐ終わったんだ！」

「はい、ところで話というのは？」

「うむ、実はTが今月いっぱいで辞めると言ってきた。」

「え？で、本当に辞めるんですか？引き止めないんですか？」

「あいつには何言っても無駄だろう」

「…。確かにそうかもしれません…。」

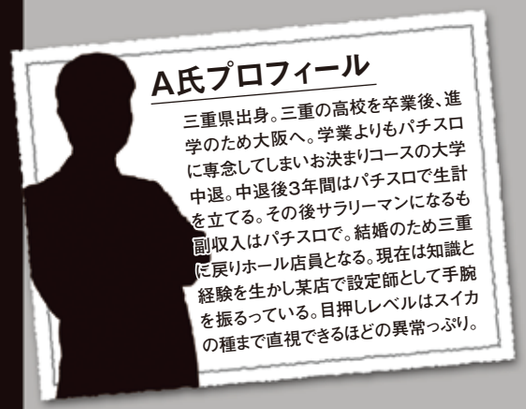
「そこでだ、明日からお前は主任に昇格だ。」

「は？なんでそうなるんですか？」

「Tの分までお前に働いてもらうためだよ。あと1ヶ月近くはTもいるが、明日から主任だ。お前に抜かれたTはどう思うだろうな、ヒャハハ！」

はっきり性格が悪いと言える。そこまでひねくれる必要性はどこにあるのか？店長の真意や本質はとうてい私には理解しがたいものだった。しかしそれに対し私は何も言えなかった。内心、昇進に喜んでいる自分がいたからだ。本来、どんな形であれ昇進というものは喜んで当たり前のことだ。ただこのときばかりはその喜んでいる自分に対し、何か分からない罪悪感がつきまとっていた。

次の主任はTさんだ、ずっとそう思っていた。同じ副主任の立場である今も、私はTさんを上司と思っている。それはTさんも同じだったと思う。それが当たり前で何の違和感もなく、お互いが満足していた。追い抜こうと思ったことも



A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。

なければ、追い抜かれるだろうと思ったこともないと思う。それがイレギュラーバウンドを起こし、変な方向に曲がってしまった。Tさんが辞めるといった決め手はなんなのか、この事実を知ったTさんはどう思うのか、私には全く予想ができなかった。

事務所から出た私は、休憩室でTさんにばったりでくわした。なんとなく気まずい空気のなか、それについて聞いてみる。

「辞めるんですね。」

Tさんは小さくうなづき、

「マトモだから辞める。この店の悪化は止められない。先はない。」

私がTさんに言ってきた言葉と似ているが180度違う言葉、そんな返事が返ってきた。現実的なその言葉はとてもTさんらしいものといえる。実際その意見は的を得ている。だから私はそれに対し何も言えなかった。さらに自分が主任に昇進する事実も、先程の何か分からない罪悪感から、言うことができなかった。ただ「お疲れ様でした」このありふれた面白みのない決まり文句を伝え、足早に店を出て行った。

差異

次の日、私は遅番だったため、夕方4時に出勤した。仕事の準備をするため、休憩室の奥にある自分のロッカーに向かった。休憩室には2人の従業員が休憩中であり、にこやかな顔をこちらに向けて「昇進おめでとうございます！」とお祝いの言葉をかけてくれた。どうやらシフト表の私の名前の部分が副主任から主任になっているのに気付いたらしい。事務所に入っても事務員からお祝いの言葉をもらい、ホールでは出会う従業員に次々にお祝いの言葉をもらった。ただ、Tさんだけはお祝いの言葉をくれなかった。もちろん、それを期待していたわけでもなく、もらうつもりもなかったのだが。Tさんとはいつもの調子で淡々と引継ぎの連絡が行われた。

一通りの引継ぎ連絡が終了すると、私もTさんもホールの巡回を始めた。ちょうどその時インカムが入る「副主任、○○番台までお願いします」H班長の言葉だった。副主任という言葉に反応してしまったが、即座にTさんが対応してくれた。それから暫くして再びインカムが入る「…A主任、○○番までお願いします」これはTさんの言葉だった。いつもなら「A君、○○番まできてくれる？」といったような感じだったのでその衝撃は甚大だったが、これが上下関係のルールである。とてもいいにくそうだった。そして私からしても決して気分のいいものではなかった。とりあえず現場に急行する。台のトラブルでTさんでも直すのが困難だったようだ。しかし、そのトラブルは私にとってはそれほど難題ではなく、簡単に処理できてしまった。H班長が私に近寄ってきて言う

「T副主任、A主任って言いにくそうでしたね！」

「言いにくいに決まっているだろ。お前は後輩に追い抜かれて、今までの命令口調をいきなり丁寧にできるか？」

「いえ、すみません…」

「だいたいお前がトラブルの対応ができないからいかんのだ、このままだったらお前も後輩に追い抜かれるよ」

H班長の何も考えないその発言が腹立たしく、チクチク虐めてやった。

いつも真面目で堅い人柄だったTさん、その丁寧な言葉は、そういう性格だから発せられたのか、私を認め、お祝いの言葉として言ったのか、今でも分からないが、私個人としは前者のような気がしてならない。私の中にある、あの時感じた妙な罪悪感、それがそう思わせるのだ。

■花火のススメ・追加と訂正■

新しい発見と確認をしてきたので報告します。左上段暖簾からの右リールについてです。前号の図2を見てください。右リール上段に⑥番の暖簾のやつです。コメントに「1コマでもスベって停止なら氷かボーナス」とありますが。もちろんこれも正しいのですが、どうやら何番の氷でも右上段にスベって停止なら氷かボーナスのようですね（②番の氷は2コマスベり以上、⑩番⑭番はビタ止まりでもOK）。

今年も宜しくお願いいたします